鎧橋随想

（順不同）

出会い

明治物産　取締役　元吉　和之

人との出会いから始まる人生。母・父・祖父母そして兄弟。やがて友人から職場の同僚・上司・部下・業界とそれを取り巻く関係官庁及び諸関係機関の方々、一方では妻から子供へと果てしなく出会いが続きます。あらゆる方々から時には厳しく、また時には温かくご指導いただき、また子供からも教えられることが多々あります。

そんな折、私事で恐縮ですが、今年2人の子供が高校、大学とそれぞれ受験しました。まさか我が家に受験生がいたとは、それも2人も……。本人たちはそれなりの努力をした（？）から目標校は大丈夫と自信満々だったが、親からみれば家庭内に受験ムードは感じられず、結果は見えていた。いい人生勉強になってくれる事を祈っています。

意識せざるとも親は子を、また子も親をよく見ている。職場でも同様に、男女、年齢に関係なくお互い見抜き見抜かれていることを肝に銘じながら、社会・業界の急激な変化に対応すべく、日々自分を軌道修正しながら、親としてまた社会人として、また縁があって知り合った職場の仲間たちとも責任を持って接することを自分に言い聞かせている今日この頃です。

人間の能力

フジフューチャーズ　常務　計盛　隆澄

最近はスポーツといえばゴルフしかやっていませんが、若いころは野球も好きでやっていました。運動機能は年齢とともに下降していきますが、能力はそうとも言えないのではないかと思います。

たとえば、この2つのスポーツに共通することとして、ボールの弾道があります。高く打ち上げられた打球は放物線を描いて飛んでいくと、たしか高校の物理で教わりました。しかし、外野手は打球がこういうふうに放物線を描くからこの地点に落ちるはずだ、と思ってボールを追いかけるわけではありません。ピンを狙うときでもそうです。人間は理屈で考える前に体が反応する能力を持っています。当然、経験がその能力に磨きをかけるでしょう。

この春、各社には多くの若者が入社しました。彼らはいろんな能力を持っています。持っていないのは経験だけです。我々は、彼らの能力をまっすぐに育てる義務があります。良い経験を積んで、持っている能力を大きく伸ばしてほしいですし、それは十分可能です。なんといっても人間は物理学の理論を知らなくても、大飛球をキャッチできるほど素晴らしい能力を持っているのですから。

愛犬家

東陽レックス　常務　三橋　和廣

先日、近所の葬儀に出席することになった。亡くなった方と私とは、犬の散歩でよく出会い、言葉を交わす間柄であった。そういった知り合いは幾人か居て、そのうちのひとりの方から、「なになにさんが亡くなったからお通夜に行くのでしょ」という呼びかけがあり、それがどなたのことかすっかり忘れてしまって訊き返したところ、「ジョンちゃんの……」と犬の名でよばれ納得できた次第であった。

その人たちとは最初は、お互いに見ず知らずの間柄であって、外で会ったとしても言葉も交わさない相手ではないかと思われるのだが、我が家の犬を散歩に連れ歩き、犬同士のコミュニケーションのために自然と立ち話をすることになった間柄である。

なかなか仕事以外で知人を持つことが難しい時代であるが、犬というのは簡単にそれをさせてしまう。また、初対面の相手に犬の話題が出たりすると和やかな雰囲気になったりもする。

私としては土日の朝夕30分程、近所を連れ歩くだけではあるが、それを重ねていくうちにいつの間にか「愛犬家」という肩書きができたらしい。

森へ行こう

石橋生絲　取締役　日下　清

今年も木々の緑が濃くなり、森も鬱蒼としはじめている。春、花が咲くころ毎年思う。あと何回この季節を感じ、土いじりが出来るかと。緑が深くなると、ともかく森の中に行こうと。

日本経済が厳しくなってからは余計にその傾向が強くなった様な気がする。企業の中では、どうしても人間関係の密度が濃くなり、微妙なニュアンスの会話に気を使ったり、利用したりする。

草や木々は全く別物、ただし育てるとなると非常に正直に反応する。日陰で元気なもの、水が切れると即だめなもの。まさにそれぞれである。もし仕事としてならば非常なストレスだろうが、楽しみでやるとチョットした挑戦である。オリーブの木は水枯れに強く盆栽になる、木姿も3年もすると古木の匂いが出だす。きっとピスタチオやアーモンドの木も乾燥地方原産で良い盆栽になりそうだ。

園芸専門店に出向いてみると、毎年新しい品種の草木が開発されている。仕事として、日夜、品種改良を重ねている人がいる。超高層のビルを建てる奴もいる。自分も森の中で居眠りするには、まだまだ俗世間に未練がある。来週はミドリの草や森を忘れて、仕事に集中しよう。

にんげんだもの

ジャイコム　理事部長　島岡　光男

桜が満開だった昨年の4月、私はある人と感動的な出会いをした。と言っても妙齢な美人女性ではなく、すでに亡くなられている男性の作品に出会ったと言うのが正しいのですが……。

その男性とは「相田みつを」という書家・詩人です。ストレスで落ち込んでいた時のある深夜、友人から「にんげんだもの」の詩のメールが届き、後日、詩集を貰った時の感動は今も鮮明に残っています。

その作品は活字でなく安らぎを感じさせる独特なタッチの筆字。なにげない一言なのだが重みがあって胸にグサッとくる一言。

読んでいると何故か清々しい気分になってくる。自分の言葉・自分の書で、人間の本当に純粋で、弱いが強くなりたいという根っこの部分を真っすぐに表現した詩。どうしてこんな詩が書けるのだろうか？

興味を持った私は、略歴を読み、作品集を読み、最近は丸の内の東京国際フォーラムにある相田みつを美術館にも時々足を運び、ゆったりと作品を鑑賞し混沌とした時代に清涼剤となる癒しの、ひとときを味わっています。

つまづいたって　いいじゃないか　にんげんだもの　みつを

母の意

エース交易　専務　森　辰郎

私の母は七年前に他界致しましたが、「世の中に数千万の母あれど我が母に勝る母はなし」、万人共通の思いでしょう。子守唄は軍歌であり、昔話はお伽話ではなく、関ヶ原の戦い、明治維新、日露戦争でした。

今年は日露戦争開戦一〇〇年にあたり、特集記事も目にします。良く聞かされた歌は「広瀬中佐」でした。「旅順閉塞作戦」で行方不明となった部下の杉野兵曹を必死で探す様を歌ったものです。

最近、この日露戦争を勝利に導いたとされる『武士道』（新渡戸稲造著）が注目されています。武士道精神の強さ、やさしさ、名誉、勇気、責任を教えたかったのかと思いつつ、いまだ身につけられない己を歯がゆく思う次第です。

広瀬武夫中佐は海軍大将東郷平八郎の参謀、秋山真之の大親友でした。海軍の東郷と秋山のコンビ、陸軍の大山巌と児玉源太郎のコンビのように相性の良さや意思の疎通があって、日露戦争という厳しい戦いに勝利できたと言えます。良好なコミュニケーション、そして広瀬中佐のように人を思いやる心の大切さは現代にも通じることです。

母の意をくんで精進したいと思います。

拝見　生糸6点

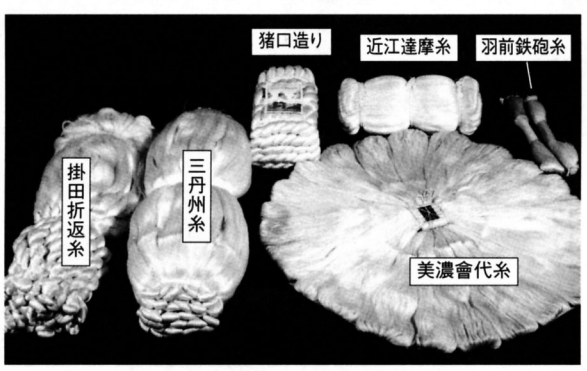
みんなで収蔵庫の整理中に、「変なものがある」「なんでしょう」とダンボール箱を開けてみたら不思議な形をした生糸が9点あった（＝写真）――シルク博物館の学芸員・石鍋由美子さんが話す〝発見〟のてんまつである。

この生糸は、横浜開港（1859年）ごろのもの6点と昭和初期のもの1点、戦後のもの2点だった。開港当時の生糸は産地によって荷姿が異なっていた。見付かったのは、掛田折返糸（福島県掛田地方の明治時代の輸出生糸）、羽前鉄砲糸（山形県の明治初めころのもの）、美濃曾代糸（岐阜県美濃・飛騨地方で盛んに生産された糸）、近江達摩糸（滋賀県長浜の縮緬の原料として使用された）、三丹州糸（京都府・兵庫県の丹波・丹後・但馬で生産された）・猪口造り（国営富岡製糸所）の6点。

約150年前の生糸は東京農工大繊維博物館に2点所蔵されている以外は存在しないので、極めて貴重なもの。

いずれにしろ、日米和親条約が結ばれてから150年、横浜商品取引所の前身である株式会社横浜蚕糸外四品取引所の開設から110年という節目での発見。

明治・大正・昭和と日本経済を支えてきたのは生糸貿易であり、戦後復興の担い手のひとつも生糸貿易だった。



150年の歴史語る

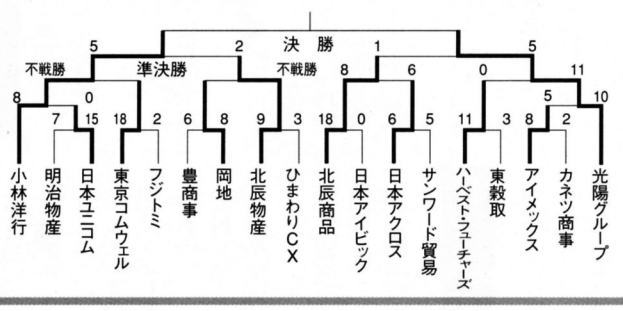
シルク博物館
横浜商品取引所

この伝統ある生糸を100年以上、一貫して上場し続けてきたのが横浜商取で、貴重であり、稀なことでもある。

シルク博物館と横浜商取は財団法人シルクセンター国際貿易会館（会長は県知事）に同居しており、それぞれ横浜の生糸の長い長い歴史を示している。横浜商取の野村長次常務理事は、歴史を語る生糸発見について、「横浜の重みをひしひしと感じています」と語っている。

第13回商品取引員親睦野球大会

準決勝までの結果（太線が勝利）。決勝戦、3位決定戦は千葉マリンスタジアム（6月22日予定）



事務局だより

「商品先物取引に係る懸賞論文」の表彰式が5月31日に行われ、表彰式後の講演会では名古屋大学大学院の家森教授が商品先物市場の役割について、日本経済の構造改革との関連を講演されました。

市場規模の拡大のためには先物市場の機能や制度等に関する学術的な理論整備が不可欠であり、当協会ではそのような観点から「研究調査助成金制度」等により商品先物に関する学術的研究に対する支援事業を行っております。

今回の表彰式を一つの契機として研究支援事業をより充実し、多くの研究者の方々が商品先物市場の研究に携わるようになれば非常に嬉しいことだと思います。